



(注意) 文学部はⅠのみを解答すること。

Ⅰ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

ファッションは着る人を語ります、また他の人の着ているものがファッションナルではないということも示すのです。

(オスカー・ワイルド)

これは十九世紀アイルランド生まれのイギリスの作家ワイルドが書いた戯曲の中の言葉である。わたしたちは、ふだん意識せずに言葉を話しているけれど、自分が身につけているものも意味を放っているとしたら、それは言葉と同様に記号だといえるだろう。動物も言葉を話すが、ここまで複雑に言葉を操っているのは人間だけだ。服が放つてしまう意味というのは社会のさまざまな複雑な物語を表現している。ときにそんな意味の病に、カラめとられて人間は身動きできなくなる。意味は多義的で比喩的になり、とらえがたい存在となることも。服は言葉である——この文章を鍵にまずは論を進めていきたい。

わたしたちは、様々なアイデンティティの網の目に日々生きている。生まれるとすぐに、ガーゼのようなやわらかい白い布にくるまれ、たとえば男の子なら水色の服を、女の子ならピンク色の服を身につける。色によってジェンダーという社会的意味を身に纏うことを体験する。

お宮参りや七五三などの伝統的行事では、いつもと違う服を着用する。ボタンやファスナーはその服には存在せず、布が、イグ|枚も重ねられ、帯でぜんたいを締める。はじめての和装、日本の民族服を身に纏う。先ほどの子供服の水色はいまいったかもしれないが、このような機会には男の子が赤い着物を着ることはまずない。女の子が黒い着物を着ることも。男か女かというジェンダーの意味を着させられるだけでなく、このような行事では国や民族という意味を着ることになる。

小さな体でも、その服を「いつもと違う服」と認識することができるに違いない。わたしたちが住む場所が、日本と呼ばれている国(ネーション)であるということ、自分がそこに住む人間であるということ、世界には他にさまざまな国があり、そこに様々な人々が住んでいるということ、その服は、自分が日本人であるというアイデンティティを誇るべきものとして意識させることができるだろうか。

さて、学校に通うようになると、所属する幼稚園や小学校など、その建物内で着るように決まっている服、その学校の生徒であることを表現する制服というものを身につけるようになる。女の子はスカートで、男の子はズボン、色は紺やグレー。現在は有名デザイナーに制服のデザインを依頼する学校も多いと聞かから、色もスタイルも様々なの

かもしれない。どちらにしても、制服というユニフォームは組織の一員であることを示す。日本のユニフォーム文化は、世界にも類を見ないものとして、最近ファッション界でも注目されている。

さて、現在ファッションという言葉は、個人を表現する手段というニュアンスを強く感じさせる言葉だが、帰属する集団やグループのなかにいる(わたし)を服によって表現するということを、わたしたちは小さい頃から体でおぼえる。共同体の一員である自分を、少し離れたところから眺める経験をともなうて、自分がさまざまなアイデンティティという意味を着ていること、その網の目の中に生きる存在だということ、つまり、人間は一人では生きていけない、時間と空間を人々と共有するいくつもの「社会」のなかで生きているという事実を現実として認識する。あるいは、服が、そんな社会のルールを教えてくれる。

ファッションという言葉は、そのまま「流行」という意味でも用いる。これはもともと、市場の新しいスタイルを、牽引する小さなグループが着ているもの、という意味合いが強かったからだ。しかしその小さな芽は、葉を出し、成長し、大きく拡がり、街に花を咲かせる。つまり、スタイルが裾野に広がり、多くの人が享受できるスタイルとなつて、「ファッション」と呼ばれるにいたる。

この英語の「ファッション」(fashion)という言葉は、「振る舞い」「マナー」「方法」という意味もあり、もともと上流階級の人々のあいだで共有された、衣装を中心とした身のこなしなどの「流行」を指した。現代では階級を表すスタイルというのは考えにくいことかもしれないが、クラス・アイデンティティを身なりで表現するというわけだ。そんな特権的なファッションに対抗するものとして、あるいはファッション自体を底辺から押し上げる現象となつて、ポピュラー・カルチャーとしてのファッションが生まれる。そのような自由なファッションの時代にわたしたちは生きている。

ファッションは「新しい風」という比喩で定義されることもあるが、今まさに新しいスタイルでなければならぬ。しかし、その「今」はすぐに新しい「今」に取ってかわられるという運命にさらされている。新しいものはすぐに古くなる。だからこそ「新しい」。未来には「現在」が過去になると同様に。しかし、ファッションの場合、古いものが新しいものとなつて生まれ変わることもしばしば。「ファッションはめぐる」とはファッションについてよく言われる言葉だが、たとえば二十一世紀に入つて一九六〇年代のサイケデリックなファッションが新しいスタイルとして流行したり、十八世紀のロココ時代のファッションが取りあげられたりする。

ファッションに対して、「ファッド」(fad)という言葉も存在する。それは新しいファッションを提案したり、それをいち早く取り入れる「トレンド・セッター」や「トレンド・リーダー」と呼ばれる人々が、そのスタイルが大衆的になる前に享受する新しい

スタイルのことを意味している。しかし、「今」はすぐに過去へと回収されていくものだから、何が新しいか、何がファッションブルカを、絶対的に決めることなど不可能である。つまり、人はみな自分のファッションを着ているのだから。つまり、^②自分の時間を着ているのである。

自らも特異なスタイルでファッションを謳歌したオスカー・ワイルドは、冒頭に引用した文章でこのことを表現している。自分の着ているものは、自分にとつての「今」である。それは、他の人が着ているもの(＝自分のスタイルとは違うファッション)は、自分にとつては「ファッションではない」ということを同時に示している。それは自分の判断であり、選択であり、価値観になる。ファッションは自分の時間のなかにあり、それがたまたまファッション界とスピードを同じくしているのか、少し早いのか、遅いのか、はたまたその時間とは別の違う流れのなかで生きているのか、それだけのことだ。

唯一無二の個としての「わたし」、どこかの共同体の一員である「わたし」、両方の表現が拮抗して「わたし」をめぐる現象するのがファッション。ジェンダー、ネイション、エスニシティ、クラス以外にも、大人か子供か、国よりもっとローカルな場所などのアイデンティティを示すこともある。声を出さずとも、服が「わたし」を語ってしまう。また、ファッションが誰でもいつでも楽しめる大衆文化となった現代では、そのアイデンティティの意味と戯れることができる。それは、オスカー・ワイルドの時代のように奇異なことではない。ファッションそのものが目的となり、ファッションが何かを示してしまうというその性質で遊んでしまおうというわけだ。服によって別の誰かになりきる時間を楽しむ「コスプレ」(costume play)などは、そのケンチヨな事例だろう。わたしたちは意味を放つだけに飽きたらず、言葉そのもので遊ぶなんとも贅沢で優雅な動物なのだ。

アリストテレスは、「人間は社会的動物である」と定義したが、これは、言うまでもなく人間は他の動物と違っているということを示すと同時に、人間も動物であるという意味を含んでいる。わたしたちは動物とは違い、裸で外を歩くことはない。それはルールであり、猥褻物陳列罪という社会的制裁を受けるからという理由だけではなく、恥ずかしいという感覚を持っているからだ。この「恥じらう」感覚が、人間が他の動物とは違った「動物」であることを考えるのに、役に立つ。

「恥ずかしい」という感覚について考えるとき、西洋のキリスト教文化で語られる「原罪」のエピソードがしばしば紹介される。アダムとイヴがキンキの知恵の木の実を食べ、それまで全裸で生活していた二人が「羞恥心」という感覚を初めてもって、男も女も生殖器をイチジクの葉で隠した。人は裸のまま生きていくことなく、^④なぜ服を着るのか、というシンプルにして深淵な問いに、他の動物と違って人間は生殖器を隠す、その「羞恥心」のあらわれ、とまず答えることができるだろう。

英語で「赤ん坊」を受ける代名詞が「*cute*」であり、「*sexy*」でもないのは、赤ん坊がまだ動物に近いからなのかもしれない。生まれたときは、動物さながら、生殖器を隠したいという恥じらいもない。それは男女の差がわかりにくいからというだけでなく、羞恥心をもちえないからだと考えてみたい。「種の保存」という本能的欲求は、簡単にいえば「子孫を残す」ということだが、生殖器を隠すという行為は、恥じらいからではなく、その大切な仕事をするための体の器官を守るという役割も果たしている。つまりそれは、暑さを調節したり、寒さから身を守る、「身体保護」の機能だ。

服をなぜ着るのかという問いに対して、羞恥心という感覚のあらわれ、自然環境や外敵から身を守る行為、この二つをあげたが、服飾史のなかでもう一つきまって並ぶのが、体を飾るための行為という要素である。化粧やピアスは新しい現代の文化というわけではなく、儀礼行為として太古の昔から存在する。未開民族の「身体装飾」の慣習は、人間の原始的行為であり、現代の文明社会を探る手がかりになる、という考え方は文化人類学では常識とされる。

恥じらいや身を守るためという理由は、結局のところ、種の保存という本能的欲求のヴァリエーションにほかならないと考えられないだろうか。人類学や生物学に頼らなくとも、クジャクのオスだけが持つ美しい虹のように輝く羽根を思い出せば、飾る行為が何のためにあるのかはおのずと明らかになる。では、装飾行為はすなわち生殖行為なのか。なぜ、わたしたちは「着る」のか、という問いへの答えは、それだけでは、どこか物足りない。なぜならわたしたちは、「社会的」動物なのだから。

服が様々な意味を持ち、言葉(記号)の役割を果たしていることを具体例をあげながら論じてきた。服はときに国や民族を象徴するものであったり、男であること女であることを表現するものであったり、社会の体制に対して、イギ申し立てする手段であったり、外国文化を身に纏うことであったり……。

流行という情報を着て「新しさ」や「今」という旬を味わい、服を着替えることによって気持を切り替え、さまざまな役割を物語のように演じ、イメージを脱ぎ着して遊ぶこともできる。衣服を着る根源的な要因として、「身を飾るという行為」「身体を保護すること」「羞恥心を持つこと」を挙げたが、——これらはすべて「文化」である。裸をさらすことを恥ずかしいと思わない民族も地球上には存在する。正確にいえば、恥の感じ方は千差万別であるからだ。つまり、それは相対的なもので、場所や時代が変われば羞恥心の表現も変わる。また隠すことで恥じらいが表現されることもある。布で「覆う」ことで裸という意味があらわれてくる。

アリストテレス風にいえば、わたしたちは「社会的動物」だから、一人で生きていくことはできない。誰か他人をひきつけたという気持は、「見られたい／見られたくない」というアンビヴァレントな心と体の表現によって、外部＝社会にあらわれる。自分

にはその意図がなかったとしても、着ている服が特殊な意味を放ってしまうこともある。さて、美しいものを身につけたり、お洒落を楽しんだりすることは、あたりまえのことなのだろうか。今日着ていくものを今日自分が決定できる自由。^⑤ 服は言葉であり、それは意味を着る行為。意味は、ときには言動を決めてしまう不自由さであり、わたしたちは社会において様々な不自由を体験する。その時その場所が必要なアイデンティティを意識して生きてもある。いろいろな役割を背負わなければならないとしたら、そのイメージに力を借りたり、しなやかに脱ぎ着したいものだ。

自分の言葉を、好きなときに着て、好きなときに脱ぎ、他人と会話し、つながっていく。そんな時代や社会に生きていることの自由と不自由を実感し、また自分の言葉のリズムを創っていくことができれば、もっと力強くもっと楽しくファッションとつき合っていけるのではないか。

今日着ているあなたの服は誰のための何のための言葉だろう。

(小野原教子『闘う衣服』による)

【注】

- サイケデリック：幻覚的。幻覚剤による幻覚や陶酔の状態を想起させる極彩色の絵画、映像、音楽、デザイン等の表現も指す。
- ロココ：装飾様式の一つ。渦巻・花飾・唐草などの曲線模様を好み、繊細さ優美さを特色とする。
- アリストテレス：古代ギリシアの哲学者。

問一 傍線部 a～j のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①「服が」「社会のルールを教え」とはどういうことか。本文に即して九〇字程度(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問三 傍線部②「自分の時間を着ている」とはどういうことか。一〇〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

問四 傍線部③について、以下の問に答えよ。

(1) 傍線部③「遊ぶ」とは現代人のどのような振る舞いを指しているか。八〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)で説明せよ。

(2) 傍線部③に合致する事例を次の選択肢の中から一つ選べ。

ア クジャクのオスが美しい虹のように輝く羽根を持つこと。

イ 上流階級の人々が衣装を中心とした身のこなしなどのスタイルで特権性を表す

こと。

ウ 美しいものを身につけたり、お洒落を楽しんだりすること。

エ ファッションを「新しい風」という比喩で定義したり「ファッションはめぐる」と表現したりすること。

問五 傍線部④について、筆者が挙げる三つの要因を本文中からそれぞれ四字以内で抜き出して答えよ。

問六 傍線部⑤によって、筆者は服を着る行為のどのような性質を指しているか。次のキーワードをすべて用い、本文全体の趣旨を踏まえて一二〇字以内(句読点・かつこ類も字数に含める)でまとめよ。

記号 アイデンティティ 自由 役割

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

【Ⅰ】 建仁三年の年、霜月の二十日余りいく日の日やらむ、五条の三位入道俊成、九十に満つと聞かせおはしまして、院より賀賜はするに、贈り物の法服の装束の袈裟に、歌置かるべしとて、師光入道の娘、宮内卿の殿に歌は召されて、紫の糸にて、院の仰せごとにて、置きて参らせたりし。

ながらへてけさぞうれしき老いの波八千代をかけて君に仕へむ

とありしが、賜りたらむ人の歌にては、いまし良かりぬべく、心のうちにおほえしかども、そのまま置くべきことなれば、置きてしを、^Y「けさぞ」の「ぞ」文字、「仕へむ」の「む」文字を、「や」と「よ」とになるべかりけるとて、^Xにはかにその夜になりて、二条殿へきと参るべきよし、仰せごととて、範光の中納言の車とてあれば、参りて、文字二つ置き直して、^Aやがて賀もゆかしくて、夜もすがら候ひて見しに、昔のことおほえて、^イいみじく道の面目なのめならずおほえしかば、つとめて入道のもとへそのよし申しつかはす。

君ぞなほ今日より後も数ふべき九かへりの十の行く末 (『建礼門院右京大夫集』)

【Ⅱ】 今年建仁三年になむ侍る。その次の年の冬ごろに、限りあればはかなくなられにき。さばかり色にのみこそ染み深くものし給ひけむに、終はりも乱れざりけりとぞ聞こえ侍りし。あはれ、歌のたくみなりしさまはこの世にたぐひ少なくや侍りけむ。水無瀬殿に渡らせ給ひしころ、にはかに歌合ありて、八幡の若宮へ参らせ給ふこと侍

りき。それ勅判にて侍りし。その御判の詞に、「俊成入道が申しき」と書かせ給ひて侍りしか、君もさほどに許し思召いたりし、返す返すもありがたく見侍りし。されどその二郎の中將、おほかた劣らぬとぞ申しあへる。げに詠み口の劣りはえ見知り侍らず、下り立ちよろづに暗からぬ方は、いづくのけぢめには見え侍るべき。入道うせられて後、この人ものし給はずは、いかさまにせましとのみ思ひあへり。

〔源家長日記〕

【注】 ○俊成：藤原俊成。平安末期・鎌倉初期の歌人。 ○院：後鳥羽上皇。

○賀：賀宴。長寿の祝い。 ○宮内卿の殿：後鳥羽院に仕えた女房で、当時の代表的歌人。

○歌置かるべし：「置く」は、ここでは刺繍するの意。筆者(建礼門院右京大夫)が命ぜられたのである。

○二条殿：後鳥羽院の御所。 ○水無瀬殿：現在の大阪府三島郡にあった、後鳥羽院の離宮。

○八幡の若宮：石清水八幡宮に付属する神社。 ○参らせ給ふ：歌合を奉納する。

○勅判：歌合の判者が上皇であること。 ○二郎の中將：藤原定家。鎌倉時代前期の代表的歌人・歌学者。

○けぢめ：区別。優秀。 ○下り立ち：熱心にする。

問一 波線部Xの和歌をYのように改めると、歌の意味はどのように変化するか、説明せよ。

問二 傍線部ア、エを、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 二重傍線部「なられにき」を文法的に説明せよ。

問四 (A)俊成が撰者として編纂した勅撰和歌集、(B)院(後鳥羽上皇)の命によって二郎の中將(定家)らが編纂した勅撰和歌集の名称を、それぞれ漢字で記せ。

Ⅲ 次の文章を読んで後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

桓公^{くわんこう}与^あ管仲^{くわんちゆう}、閼門^{かつかん}而^{して}謀^{はかり}伐^つ莒^{きよ}、未^{まだ}発^{はつ}也^{なり}。而^{しか}已^や聞^{きこ}於^{こゝ}国^{くに}矣^{なり}。桓公怒^{こゝろをいかり}、謂^い管仲^{くわんちゆう}曰^い、寡人^{わがひと}与^あ仲父^{ちゆうふ}、閼門^{かつかん}而^{して}謀^{はかり}伐^つ莒^{きよ}、未^{まだ}発^{はつ}也^{なり}。而^{しか}已^や聞^{きこ}於^{こゝ}国^{くに}。其故^{そのゆゑ}何^{なに}也^{なり}。管仲曰^{くわんちゆうい}、国^{くに}必^{かならず}有^あ二^{ふた}聖人^{せいじん}。桓公曰^{くわんこうい}、然^{しか}。夫日^{そのひ}之^の役者^{やくしや}、有^あ下^{した}

執^{しつ}席^{しやく}食^{しやく}以^{もつ}視^し上^{じやう}者^{しや}。必^{かならず}彼^{かれ}是^{なり}邪^や。於是^{こゝに}乃^{しか}令^め之^を復^ふ役^{やく}、母^{はは}得^え二^{ふた}相^{さう}代^{だい}。少^{せう}焉^{なり}、東郭^{とうくわく}郵^{ゆう}至^{いた}。桓公^{くわんこう}令^め二^{ふた}僕^{ひく}者^{しや}延^{のほ}而上^{のぼ}、与^あ之^を分^わ級^{きやく}而上^{のぼ}。問^と焉^{なり}曰^い、子^こ言^い伐^{はつ}莒^{きよ}者^{しや}乎^や。東郭^{とうくわく}郵^{ゆう}曰^い、然^{しか}、臣^{こゝれ}也^{なり}。桓公^{くわんこう}曰^い、寡人^{わがひと}不^な言^い伐^{はつ}莒^{きよ}。而^{しか}子^こ言^い伐^{はつ}莒^{きよ}、其^{その}故^{ゆゑ}何^{なに}也^{なり}。東郭^{とうくわく}郵^{ゆう}对^{こたへ}曰^い、臣^{こゝれ}聞^{きこ}之^を、君^{きみ}子^こ善^よ謀^{はかり}、而^{しか}小^{せう}人^{じん}善^よ意^い。臣^{こゝれ}意^い之^を也^{なり}。桓公^{くわんこう}曰^い、子^こ奚^{なん}以^{もつ}意^い之^を。東郭^{とうくわく}郵^{ゆう}曰^い、夫^そ欣^{きん}然^{ぜん}、喜^{よろこ}樂^{らく}者^{しや}、鐘^{かね}鼓^こ之^の色^{しき}也^{なり}。淵^{ふみ}然^{ぜん}、清^{きよ}静^{じやう}者^{しや}、纓^{えい}經^{きやう}之^の色^{しき}也^{なり}。漻^{かう}然^{ぜん}、豊^{ほう}滿^{まん}而^{して}手^て足^{そく}拇^ぼ動^{どう}者^{しや}、兵^{へい}甲^{かう}之^の色^{しき}也^{なり}。日^ひ者^{しや}、臣^{こゝれ}視^み君^{きみ}之^の在^あ台^{たい}上^{じやう}也^{なり}、口^{くち}開^{ひら}而^{して}不^な闔^{かん}、是^{こゝに}言^い莒^{きよ}也^{なり}。挙^あ手^て而^{して}指^さ、勢^せ当^{たう}莒^{きよ}也^{なり}。且^{かつ}臣^{こゝれ}觀^{かん}二^{ふた}小^{せう}国^{こく}諸^{しよ}侯^{こう}之^の不^な服^{ふく}者^{しや}、唯^{ただ}莒^{きよ}。於是^{こゝに}臣^{こゝれ}故^{ゆゑ}曰^い伐^{はつ}莒^{きよ}。桓公^{くわんこう}曰^い、善^よ哉^や。以^{もつ}微^み射^{しや}明^{めい}、此^{こゝに}之^を謂^い乎^や。子^こ其^{その}坐^ま。寡人^{わがひと}与^あ子^こ同^{どう}之^を。

〔管子〕による)

【語注】

○桓公：春秋時代、斉の国の君主。 ○管仲：桓公に仕えた賢臣。仲父と呼ばれた。

○莒：国名。 ○寡人：王侯の自称。 ○夫日之役者：あの日、労役に従事していた者。

○席食：むしろと食べ物。 ○東郭郵：人名。 ○僕者：取り次ぎ役。

○分級而上：主人と客が別の階段を上る。東郭郵を賓客として処遇していることを示す。

○欣然：うれしそうさま。 ○鐘鼓之色：音楽を楽しむ表情。

○淵然：深く沈むさま。 ○纓經之色：喪に服す表情。

○漻然：意気盛んなさま。 ○拇動：親指までも動く。

○口開而不闔：是言莒也。口を開いて閉じないのは、莒という語を発音していたのである。

問一 波線部a「与」b「然」c「乃」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部1「其故」の「其」とは何を指すか、説明せよ。

問三 傍線部2「必彼是邪」を、「彼」と「是」の内容を明らかにして現代語訳せよ。

問四 傍線部3「子奚以意之」を現代語訳せよ。

問五 傍線部4「且臣觀二小国諸侯之不服者、唯莒」を書き下し文にせよ。

問六 傍線部 5 「以_レ微射_レ明、此之謂乎」とあるが、桓公がこのように言ったのはなぜか。本文の内容を踏まえて、百五十字以内で述べよ。



电话: 400-6321-400/13601043104(微信) QQ: 1925811302

地址: 北京市海淀区海淀路北大资源东楼 1433 室